

# 多読と錯覚と身体

橋本 安央

## 1. はじめに

わたしはいま、いわゆる「英文科」に所属しており、大学1年生の英語科目から大学院でのアメリカ文学の授業まで、大学教育における英語英米文学関係のほぼ全課程に携わっている。だが、高校生のわたしにとって、英語はことさら得意科目でもなかった。数学と国語の方がましだった。ただ、日本のものにせよ翻訳ものにせよ、小説を読むことは好きだった。

英語の力がついたのは、大学に入学したのちのことだったと思う。当時はインターネットで手軽に洋書を手に入れる時代ではなく、洋書をあつかう書店もかぎられていた。大学入学後、未知の世界にたいする憧れから、そうした店舗に足を運び、英語が比較的簡単で、面白そうな小説のペーパーバックを適当に選び、下宿先にもちかえて挑戦した。自分が新しい世界に入ったような、大人になったような、うわついた気持ちだったことを覚えている。基本的に辞書はひかず、雰囲気、いきおいで、何とか通読しようと試みた。だがいつも、まったく歯がたななかった。粘る気持ちが足りなかった。あきらめてから1週間ほど経つと、「本が面白くないから」と都合よく解釈し、また書店に行ったら新しい本を手にとる。そうしたことを繰り返した。まだ洋書が高値だった時代だ。ずいぶん無駄な買い物だったのだろう。辞書をひいて読むならば、とても200ページ、300ページの小説など最後まで辿りつかない。わかっていようがいまいが、読みつづけることに意味がある。そう思いこみ、それを実践しつづけた。そして失敗しつづけた。そうして10冊ほど挫折したのちのことだったろうか。ようやくはじめて最後の頁まで辿りつくことができたのは、J. D. Salingerの*The Catcher in the Rye*だった。細かいところまで理解してははずがない。だが、素直に嬉しかった。自信になった。そうして英語で小説を読む習慣を身につけたわ

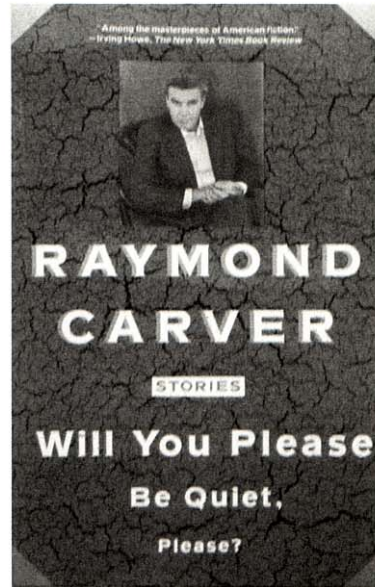
たしは、アメリカ文学を専攻に選んだ。たったひとつの達成感が、わたしを次の書物にいざなった。次の次の書物へといざなった。

わたしが勤める大学の新生たちを見ていると、英米文学が専攻であっても、高等学校を卒業するまでに文学を読みこんでいる学生数はそう多くない。ましてや英語の多読を苦もなくこなす学生も多くはない。そうした若者たちに、英語で小説を読むことにたいする動機づけをするために、英文の1・2年生を対象とした英語の講読系科目を担当する際、わたしはいつも20世紀のアメリカ小説、それもできるかぎり短めのものを、半期のうちにさまざまに読みこなすことにしている。一見英語がやさしいし、よかれあしかれ多かれ少なかれ、アメリカナイズされた現代日本文化において、若者の感性に違和感なく受け入れられる傾向にあるからだ。現在の大学では Semester制をとっているところが多く、とてもではないが長篇作品にとりくむ時間は与えられていない。そしてまた、短めのものをいろいろ読む方が、目先が変わって受講生の好奇心を維持しやすいようでもある。わたしの授業では、とりわけ1970年代から80年代に書かれたミニマリズム系の短篇作品をとりあげることが多い。それらはヴェトナム戦争後、大きな物語への信頼が喪われたアメリカ社会において、日常的な風景を描きながらも、言葉を削りとることで、読み手に行間を読みこませる、すなわち読み手にかかわりを求める作風にあるからだ。たとえば Raymond Carverの短篇集*Will You Please Be Quiet, Please?*に収録されている、1978年の作品“Bicycles, Muscles, Cigaretts”(「自転車と筋肉と煙草」)を、かりにわたしが多読の授業で用いるとすればどうなるのか。多読をつうじて次の世界にいざなうための、ひとつの在りようとして、以下をお読みいただければ嬉しく思う。

## Raymond Carver *Will You Please Be Quiet, Please?*

物語のタイトルは、一見したところ何の脈絡もない三題噺のようである。舞台はどこにでもありそうな、郊外の住宅街だ。季節は11月初旬、朝夕が肌寒い時期である。Hamilton 夫妻には、9歳になる Roger という息子がいる。夕食の支度を終えたころ、息子の帰宅が遅いことを訝る夫妻の家の玄関前に、見知らぬ少年が現れる。Roger と Kip と Gary Berman という名の、遊び友だち3人が、なにやらトラブルを起こしたため、それぞれの親に彼の自宅に来てほしいという母親からの伝言を、彼は携えている。夫の Evan Hamilton は禁煙2日目、もっとも苦しい1日だが、父親としてのつとめを果たすべく、いわれるがまま彼の自宅と一緒に向かう。先方の家で母親から話を聞くと、どうやら3人の子どもたちが、この家の子ども Gilbert の自転車を休暇中に借り出して、それを壊してどこかに棄てたようなのだ。だが3人のうち誰が最後に自転車を見たのか、誰が壊して棄てたのか、子どもたちのあいだで責任転嫁の諍いが起こる。そのさなか、Gary の父親が現れて、子どもの喧嘩に口を出す。慇懃無礼な彼は、自分の息子を身びいきし、子どもの Roger までも侮辱する。ただでさえ禁煙中のためいらだつ Evan は、それにおもわず憤り、彼ととっくみあいの大喧嘩をしてしまうのだ。それも子どもたちの眼前で。

帰宅後ひさしぶりに張りつめた筋肉を落ち着かせながら、Evan は自身の父親がかつて大喧嘩したことを思い出しもする。Roger は強い父親の姿に親近感を抱くのだが、父にとり、ことはそれほど単純ではない。禁煙ですら単純な営みではないのだ。



### Raymond Carver (1939–1988)

短編小説家・詩人。オレゴン州クラツツカニ一生まれ。夜間働きながら、チコ州立大学の創作クラスでジョン・ガードナーに師事した。その間、様々な職を転々とし、30代にはアルコール依存症に苦しむも、1977年に断酒して再起した。

日本では村上春樹氏の翻訳により有名になり、多数の短編集が出版されている。

代表作は *Where I'm Calling From*, *Cathedral* など。また Carver の9つの短編と1篇の詩をもとに構成された映画 *Short Cuts* (1993) がある。

## 2. 五感の語感

物語の冒頭部分を引用しよう。以下、引用の最後にするす括弧内の数字は、Vintage Contemporaries 版における頁数を示す。

It had been two days since Evan Hamilton had stopped smoking, and it seemed to him everything he'd said and thought for the two days somehow suggested cigarettes. He looked

at his hands under the kitchen light. He sniffed his knuckles and his fingers. (195)

高校生でも充分読める英語である。英語のレベルのみならず、描かれている心理も「読める」だろう。禁煙をはじめて2日目だ。指には煙草の匂いが染みこんでいる。禁煙の苦しみを知らずとも、何かを我慢し抑圧するときは、逆にどうしてもそれを意識せ

ざるをえない。そうした感覚は、10代の若者も経験的に知っている。そうした彼らの日常体験を、だけでも日頃は忘れていたことを、この冒頭場面は想起させてくれるのだ。そしてまた、煙草の匂いという嗅覚に根差した感覚が、読み手の嗅覚を想像のなかで刺激する。ちなみに指の匂いをかぐ行為は、物語のエンディングの伏線となっているのだが、この段階ではもちろんそこまで説明しない。

そうして子どものトラブル解決のため、父親が相手の家まで足を運ぶ。自分の見知らぬブロックに足を踏み入れたとき、父は子どもの生活範囲の広さに驚かされる。次は呼び出された家のリビングにて、父親の Evan Hamilton が腰をおろす場面である。

Hamilton sat down in a chair at the other end of the table and looked around. A boy of nine or ten, the boy whose bicycle was missing, Hamilton supposed, sat next to the woman. Another boy, fourteen or so, sat on the draining board, legs dangling, and watched another boy who was talking on the telephone. Grinning slyly at something that had just been said to him over the line, the boy reached over to the sink with a cigaret. Hamilton heard the sound of the cigaret sputting out in a glass of water. The boy who had brought him leaned against the refrigerator and crossed his arms. (197-98)

視覚で直接とらえるのではなく、煙草をグラスの水で消す、ジュッ、という音のみが聞こえてくる。Evan は煙草の火が消える瞬間を見ていない。音だけが聞こえてくるのだ。だから父親のいらだちは、聴覚から想像上の視覚をつうじて生じてくる。読み手は活字をとおした視覚をつうじ、みずからの聴覚と視覚に刺激をあたえ、それを追体験する。“[E]verything he'd said and thought ... somehow suggested cigarets”という言葉の意味を、聴覚と視覚を動員させることで知るのだ。大人は息子の前でみっともないさまを見せられぬと意識もしているはずである。その緊張感が、いっそう彼を緊張させ、煙草への自意識に結びつけるのだろう。したがって、彼はおそらく掌に汗をかいている。これはたしかに読み過ぎ

なのかもしれないが、ときにわたしたちは日常生活のなかで、こうした深読みをしていないだろうか。英語をさくさく読みながら、このような軽めの雑談もまじえてゆく。

時間が許せばさらなる雑談をかさねることもある。煙草の匂いが混ざる汗をかく、自身の姿に気がつくとき、父は自身の身体を意識する。身体意識とは、「わたし」が見つめるもう一人の「わたし」という二重意識のなかで形成されゆく感覚なのだという、身体論めいた雑談をする。あるいはかりに、物語の舞台が日本であれば、はたして父親が人の家まで行くだろうか。比較文化論めいた話もよい。そうした身近な例をあげ、受講生に実感に基づき想像してもらおう。かの国には「建国の父」という言葉があり、わが国には「岸壁の母」という言葉があるが(すこし例が古すぎるが)、それはどうしてなのだろう。アメリカにおけるベースボールという「国技」では、たとえば映画 *Field of Dreams* を観てもわかるように、母の居場所は見出せない。こうした側面が、フェミニズム運動がアメリカにおいて立ち上がった原因と、いかに連動するのだろうか。そうして雑談は拡散する。英語という「手段」をつうじ、知的関心をいざなうための雑談も、とても大切な営みなのだ。

次は Gary Berman の父親が、自分の息子の言い分だけを聞こうとして、2人して密談のため別室に移動しようとする場面である。

Hamilton watched them go. He had the feeling he should stop them, this secrecy. His palms were wet, and he reached to his shirt pocket for a cigaret. Then, breathing deeply, he passed the back of his hand under his nose and said, “Roger, do you know any more about this, other than what you've already said? Do you know where Gilbert's bike is?” (201)

息子とその友人の手前、Evan は「掟」の父を演じねばならない。本来的にいうならば、物事をわざと混乱させようとするかのような Berman 親子の振舞いにたいし、おかしいことはおかしいと、父は強く主張せねばならぬのだ。その一方、不要なトラブルは回避すべきであるとする、大人としての分別ないし打算もある。そのふたつの顔のうち、どちらを選

ぶべきなのか、一瞬で選択をせまられたため、Evanは汗をかいて煙草で一息いれようとするのである。子の前にて父を演じきれず、禁煙すままならぬ「大人」でしかない自身の姿に、そのとき彼は気づかされる。そうした彼の焦燥が、汗と煙草の混ざった匂いから漂ってくる。触覚と嗅覚が、彼のところに辿りつくための手がかりとなる。大人もしんどいのだ。

ついにEvanはGary Bermanの父親と、文字どおり、衝突してしまう。以下はGaryが父親に、Rogerから間抜け呼ばわりされたことを告げ口し、それについてGaryの父親が、自身の息子への身びいきのあまりRogerを罵倒する場面である。Evan Hamiltonがそれに激する場面である。

“He did, did he?” Hamilton heard Berman say. “Well, he’s the jerk. He looks like a jerk.”

Hamilton turned and said, “I think you’re seriously out of line here tonight, Mr. Berman. Why don’t you get control of yourself?”

“And I told you I think you should keep out of it!” Berman said.

“You get home, Roger,” Hamilton said, moistening his lips. “I mean it,” he said “get going!” Roger and Kip moved out to the sidewalk. Hamilton stood in the doorway and looked at Berman, who was crossing the living room with his son. (202-03)

息子を侮辱したGaryの父親にたいし、ついにEvanの我慢は限界に達してしまう。唇の渇きが彼の緊張を、視覚と触覚をつうじて伝えていよう。それに気がつく読み手も緊張する。どうして自分をコントロールできないのか、そうGaryの父親を問いたですEvanだが、この直後、彼自身がキレて殴りあい始めてしまう。自分をコントロールできないのは、Evan自身も同じなのだ。そこに禁煙によるいらだちも連動しているのであれば、二重の意味で彼は自身をコントロールできないこととなる。そうしたアイロニーが、緊張感に包まれた読み手の理性にはたらきかけ、身体感覚と理性を総動員させる。

Evanは意識的ではなく、身体が勝手にキレてしまう。筋肉が勝手に反応するのだ。忘れかけていた

動物的身体感覚である。そのとき彼は、かろうじて保っていた父の仮面を脱いでしまう。日常の理性的世界は、一皮むくと簡単に崩れ去る。わたしたちの日常は、一見おだやかで静かなものなのかもしれないが、そこには暴力が隠されている。おだやかな表層は、一瞬で崩れ落ちる可能性がある。静かなる日常とは、奇蹟の謂いかもしれぬのだ。こうした一般論の話をしてよい。あるいは世界には目に見えぬ暴力がひそんでいる。そう話をつぎ、村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』や『ねじまき鳥クロニクル』の話をするかもしれない。あるいは村上はCarverの名訳者でもあるという話をするかもしれない。受講生の関心により、語るべき物語は異なってくる。

とまれ、殴りあい自体はEvan優勢のうちに終わるのだが、彼は子どもたちの前で取り乱した自己嫌悪にとらわれざるをえない。父親失格なのだ。そうして自己を苛みながら、彼は息子とKipの3人で歩いて帰途につく。

Hamilton was sweating and his lungs burned when he tried to take a deep breath. There was a ball of something in his throat so that he couldn’t swallow for a minute. He started walking, his son and the boy named Kip at his sides. He heard car doors slam, an engine start. Headlights swept over him as he walked.

Roger sobbed once, and Hamilton put his arm around the boy’s shoulders.

“I better get home,” Kip said and began to cry. “My dad’ll be looking for me,” and the boy ran. (203-04)

咽喉もとに球のようなものがひっかかっている違和感。身体感覚とは、不自由なときにこそいっそう自覚されるものなのだろう。そしてEvanの身体がBerman家の車のヘッドライトに照らし出される。読み手もEvanもそのときに、それぞれ自身の身体を視覚をつうじて意識する。理性を失いつつも、それでも息子の前で父を演じねばならぬ彼は、何とかそれを取り戻そうとする。その試みが、“the boy named Kip”という言い回しからも窺えよう。もともと息子の友人として面識があるKipの名前が素直

に出てこないところに、息子の前で自身の動揺と興奮を抑えよう、冷静になろうと心がけている彼のところが垣間見える。親の暴力性、動物性を見て衝撃を受ける子どもの姿に、父親失格という自己嫌悪におちいる父のころは、さらに揺れるのだろう。Rogerが父親に肩を抱かれるさまを見て、Kipは自身の父親の不在に気づく。そうして彼は泣きはじめる。“My dad’ll be looking for me”という彼の科白から、アメリカにおける父と息子の主題がふたたび喚起されてくる。

そうしてHamilton親子は自宅の前まで戻ってくる。

They started up the walk to their door. His heart moved when Hamilton saw the lighted windows.

“Let me feel your muscle,” his son said.

“Not now,” Hamilton said. “You just go in now and have your dinner and hurry up to bed. Tell your mother I’m all right and I’m going to sit on the porch for a few minutes.” (204)

非日常から日常へと戻る際、まだころの準備ができていない、戻る自信がない父のころが震えている。筋肉もまだ震えている。彼は父に戻り、夫に戻らねばならぬのに、まだその心身の準備が整っていないのだ。息子に筋肉を触られることを拒む父は、触覚をおそれ拒否している。自身のころに触られるからだ。そうして筋肉のこわばりをつうじ、父の心のこわばりが照らし出される。それを息子に知られまいとする、父の仮面も照射される。

その日の夜、床についた息子が父親を呼ぶ。

“Good night,” the boy said, hands behind his neck, elbows jutting.

He was in his pajamas and had a warm fresh smell about him that Hamilton breathed deeply. He patted his son through the covers.

“You take it easy from now on. Stay away from that part of the neighborhood, and don’t let me ever hear of you damaging a bicycle or any other personal property. Is that clear?” Hamilton said. (205)

シャワーを浴びた息子の新鮮な匂いと、煙草と汗にまみれた自身の穢れた匂い。匂いに敏感な物語において、何とか父の役割を演じながらも、それにまだ違和感をいだき自己嫌悪する父のころは、息子の身体に布団カヴァーの上からでしか触れることができない様子からも窺われよう。それでも父を演じねばならぬ父。息子を直接触ることができない父のつらさ、皮膚の接触を回避してしまう父のころの弱さを、受講生たちにも想像してもらおう。他者への優しさを意識してもらおうために、子どもの行動範囲が父親よりも広いというのは、まだ社会化されていない子どもの方が、社会と階級の諸制度に組みこまれている親より自由度が高いということでもある。だが、人生のトラブルをひとつぐり抜けた息子は、父によって行動範囲をせばめられ、社会化されていくのだという、社会学的雑談をしてもよい。

“Dad, was Grandfather strong like you? When he was your age, I mean, you know, and you—”

“And I was nine years old? Is that what you mean? Yes, I guess he was,” Hamilton said. (206)

喧嘩に勝った父にたいし、息子は親近感をいっている。それと父親とのころのギャップも、読みに想像してもらおう。祖父の話を突然聞きたがる息子の姿は、男たちの系譜がアメリカの心性に根差しているさまを、三たび告げてもいるだろう。三度目なので、これはあくまでアメリカ白人の神話であり、アメリカ黒人における父子の関係性は違うのだ、という話をするかもしれない。奴隷の父に、白人のような威厳がともなうだろうか。そしてまた、カリブ海の文化も似たようなものなのだと。そこから人種問題、植民地主義の歴史の話につなげてよい。

“He [Grandfather] started smoking a pipe before he died, that’s true,” Hamilton said. “He used to smoke cigarets a long time ago and then he’d get depressed with something or other and quit, but later he’d change brands and start in again. Let me show you something,” Hamilton said. “Smell the back

of my hand.”

The boy took the hand in his, sniffed it, and said, “I guess I don’t smell anything, Dad. What is it?”

Hamilton sniffed the hand and then the fingers. “Now I can’t smell anything, either,” he said. “It was there before, but now it’s gone.” Maybe it was scared out of me, he thought. “I wanted to show you something. All right, it’s late now. You better go to sleep,” Hamilton said. (206)

祖父とおなじ匂いが自分からも漂うことを教えようとして、父は匂いが自身から消えていることに気づく。おそらくは、大量の汗とともに流れ出てしまったのだ。父は息子に父子の系譜を語るため、匂いの系譜を伝えようとする。だがそれは、空回りする。父子の系譜が揺れている。父の神話が揺れているのだ。そうした父性神話の崩壊を、匂いの欠落とEvanの自己嫌悪が物語るのだ。大きな物語が困難になりつつある、1970年代のアメリカをめぐる、60年代のヴェトナム戦争や公民権運動を手がかりに雑談してもよい。そうして物語が終わり、わたしの授業も終わる。

むろんこれらは一方通行ではなく、受講生とのやりとりのなかで営まれるべきものである。脱線や深読み(に過ぎるものも含めて)は、受講生や時間の関係によって取捨選択されるのだが、わたしはむしろ、多読こそが知的刺激をあたえるための、脱線を可能にしてくれる授業の粹組みなのだと思う。こうして次の短篇小説に移ってゆく。それがわたしの多読授業のやり方である。

### 3. おわりに

わたしかつての多読学習は、方法論などあったものではなく、勘違いの連続だった。だが、たとえそれが勘違いであっても、次につながればかまわない。言語とは、四技能すべてにおいて、量をこなさねば習得できるものではないのだから。学生のころのこうした想いは、要領的にはよくないのだろうが、それほど大きく間違っていたわけでもないような気がする。

多読に抵抗を感じなければ、たとえば語学研修な

どの際、現地の新聞や雑誌を読もうとするだろう。それらは周囲の人々と共有される話題であるから、日常会話の潤滑油にもなってくれる。そしてむろん、読む力をつける過程において、大量の英単語が頭のなかに入ってくれば、会話や聴きとりにもおおいに役立つ。知らない単語は話せないし、聞きとることも不可能なのだから。英語の四技能はすべて互いにつながっているのだ。

教員の立場でいえば、授業とはライブであり、主として身体を用いる仕事であるが、多読学習というものも、あるいは語学学習全般も、五感を総動員しておこなう身体的な営みである。読んで書いて口を動かし耳を働かせる。それに尽きよう。オーラルの訓練のみならず、読むという行為も、間違いなくひとつの身体運動なのだ。だからこそ、“Bicycles, Muscles, Cigarets”のように読み手を身体意識へといざなう読み物は、読む行為の対象としてふさわしいのだろう。その際に、生徒や学生をうまくのせることが肝要なのだとも思う。面白いという気にさせるかさせないかで、彼ら彼女らのその後の学習態度は変わりうる。身体感覚をつうじて世界が拡がりつつある「錯覚」を実感してもらうことが、多読授業における最初であり、最終でもある目標なのではなかろうか。

わたしの場合、それはたまたま小説を介した「錯覚」だったのだが、語学学習における教材は、別段何でもよいのだろう。リライト版でもかまわないし、映画のノベライズ版でもよい。高名なタレントやスポーツ選手の自伝や伝記であってもよい。学習者の進捗度におうじ、彼ら彼女らが面白がりそうなもの、教員が面白がらせることができそうなものであれば、それでよいのだ。あとは文法力と語彙力という基礎トレーニングを、並行させてやればよい。そうして学習者が背伸びをしたい、背伸びができた「錯覚」することから、すべてが始まってくれるのだ。わたしはそう考えている。

### 引用文献

Carver, Raymond. “Bicycles, Muscles, Cigarets.” 1978. *Will You Please Be Quiet, Please?* New York: Vintage, 1992. 195-207.

(関西学院大学文学部助教授)